女今川
章法

女用百人一首像鏡

全

目録

知家朝臣歌合の由来
宰相なる人の歌合の記
組附浪くの圖式
長柄の圖
くるくる撥の圖 名不附
方折形包物の番式
琴の圖并由来 名不
琵琶の圖并由来
琵琶撥の番絵
簫の号并由来
筆箪の番并由来
笛の番并由来
小鼓の番并由来
大鼓の図并由来
太鼓の圖并由来
笙の番并由来
婚姻の式具の事
八厨子の順附の番式
黒棚順附番式
百人一首讀曲歌の事

女今川の書ハ
行人の作るを
給ふべきものなれども
古へより世ふ
行ハまて女おの
職業とする世を
乃ふ雅きこうう
よくおろかにて考ふ
ふふかくること能ハ
世の乃ふ心ひそ
古への賢女烈女ふも
恥ざる心ぞ人と
なるべし

今川なぞらへて
自筆いまもる制
詞の條く
一常しもざかり
女の方はらのなぞらへ

一老女と養乃夫
者へ楽しむ
一おさまりて改めず
娘をふりて人妻
娘もの事

一大事とも雑ふく
うちうけ人ふ信ずる
一父母の恩き恩を
忘れ孝の道深し
なほ夏

一文字も無学成
長天地を不学
一道に背さんも学
ゆ新ものと言葉
神ぞの事

一正直なる人は家へ
一拾ひ長く武家
に集り武士道を
すたれぬる事

一雄勇なる人は
仏神の
加護を
一女の後利根より
万事まさる人を

女中嘆くまじ

女中はつゆ〳〵うちもの
潔なるゆゑ
くるしからぬ
はづかしき
長所
長所
長所

一人の中云へ合人の恋
を知て牙と楽むの
一衣類乃色羅と
ぶ一石仕業の

一貴も賤と法なる
ゆ我辯ぜ氣隨
と好む事
一人れ謝とあげ我ふ
者あると思ふの

一世帯沈の対面
はいかとも側をく
別ふ事
一我身隙をもらぐ
武士武士を重ねる

○あさとしき張り数の神示二三日ひさしを
て月ゆべーかくのでく
月てきてい張くるく
すくーあらうもまる
とあーくーくーくー

○文中の文字をもつて
はあれども
わどもてわうけく
けつくる板のう人ふ
のせをて月ドやう
るる板ゆそおつと色
つけをべーあるる
なり

二三ヶ月経ちてこれ
くまいんかまるる
くまいひのちく表
つき出ーらようつき
えわつくをこつり
くらくーりのらあら
ふあらくれ月てる

一人の貧窮をうたま
ぐ石仕ひやう
ぐーかぐ活る
一男女子業
人の識を潜る

一繼子に味噌を使
人の嘲を恥ざるの
一男やもめの繼母を
孔雀斗りも祝
しる代過ぎ事

一道場人へ樣
家より福らふ友代
色すれ事
一人来る時家不機
嫌小陶の形迷を樣

一、元禄の事

衣紋繕ふ袖口の
かけらるべきの
のべ〳〵の衣紋
帳も掛き夏之先

家を出べ紙の
志賀あり て無る
我と生そ支のんふ
酒を飲そ天を
陽あり 漁く男の

乾坤陰陽和合
男女生陰陽
順ずる天地自然の
理なる夫婦の
天地小離まじきを

天地始敬ひ尊ぶべ
き則天地の乾坤
をば初り心だに優
なる時夫婦
更に伝初めと根ざ

誠に恐さの至り家に入れ
て女をかまくれを
なぶ事を好むこゝばを
義人に成願て悪と
云て長く指道べし

第七 薄荷法

向を張ご法へ入いろ
角の湯とろし上是の
形をして洗べし又大
根の葉形に付て洗
よ中まろし

○ゆのり衣表裏
はしきへ入ろ中ふ
のりとゝゝろ揉
付洗べし　もとゝ
薄ゝ
○多葉形の脳のつ
ゝろ中の陸手の姿
とゝゝうけ中へ
ゝろ
○洗ゝ物の付ゝろ多葉
の跡とゝつ
ぐべし
○血の付ゝろ洗ゝの
せゝ
ゝ
ゝ

身を傾け道をなるべ
くもとめ人女し
て其業を持て此
故に女の法あること知
らざる様に形を作り

○法の付こころあり白
粉練とりこ付あり人
一人又味噌ねる少そ
法人まー
○こころうちの付ころ
ゆいぐ者うのねより
ゆそ法べー又ものい
もとこすりあそ
ゆめ法べー
○こ巳の付こころあり

あそ法べー又ものり
りこ法べりあり
○油の付こころあり
油元水少そ法べー
○油のかやこころあり
くもろうの形と言
うけあり紙とこそ人
あそ大のとクけて法
又形袋縫ふ袋二重
ホ油ようて法べる
らうこと見りのあそ
とふ手さのあ法のり
油の付ころ本と板ホ
張重ねべこと
うん古こ形よ少そ水
とすくひてひこと
流すべー形ホ

諫ホ口婦深身をいく孤
なく他の家ホ行夫ホ法を
人間孤ホ仕る身なまべ
爺の詳ホ留形ホ嫁
内なるまど孝行と法

あらくはたんせんぜんぜ
ぞ〜もさしき拍
あがりのうーすわうん
うるさきちゆくしを用
ゆくー弥勒のみ人
ようう
○蓋のつきさるゆを
ちのくくりつくゆを
もあくまもきえの
形とりしかたくく
えふをぬくうー
○盛源とれくゆは
石成とあふ入ひとく
考うべー
○柴漆とれくゆふ
しゆーとあせをゆと
いろうきうゆ

○〜〜やの材さるか
ハゆのすをとうゆを
きーくうくはをそ
ゆーくべーあうこうう
○小油のびるゆを
かもうのえうゆを
はくべーきゆーくび
うのをををうふ形
ゆくゆくいをゆーく
きまぐ〜ゆのうー
ゆうるべーはこ拍れ
ゆをせんドはくても
ー
○えうゆるの材さえ
ぐーうの腰ゆを
すりつけをべゆ

ゆ皆一二両小白彩とう
ざ皇髪形と拍ふれを
ゆて父の曲と撓んとまる
人拍こ志主小奏形〜
なくふ笑くゑうり五祝

なくもど形ゆまべ家〜以人
ともし智有人小詠ゆを家
俺ー拍こ我長魚と知
人ゑ皇ゆを拍なうべ
形形ゑ俺ー忙く

天智天皇
秋の田の
かりほの
庵の
苫をあらみ
我衣手は
露にぬれつゝ

猿丸太夫
奥山に紅葉ふみわけ
なく鹿の
声聞く時ぞ
秋は悲しき
終

蓬莱
空俳
柿本人麿
あしびきの
山鳥の
尾の
ながながし
夜をひとりかもねん

桐壺
持統天皇
白妙の
衣ほ
天の
山

山邊赤人
田子の浦に
打ち出でて
見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ
猿丸太夫
奥山に
紅葉踏み
鳴く
鹿の
聲聞く時ぞ
秋は悲しき

中納言家持
かさぎの
涙でる
橘
よ
さく
春の
まろさと
れて
歩ぞふ者にそる
雁
菱
桃
花咲里

安倍仲麿
天ハ
ゆうさけ
見
で
春日なる
みかさの山
出し月かな

須磨
明石
養擬法師
ゴウ慶ハ
却ノ
ウツミ
ヒカリ
モム
ヨヲウヂ山ト
人ヲヒカリ

淺操
蓬生
小野小町
花の色ハ
うつりに
そりな
ぬ
ぬ
我身世ニふる
なゝめセーまに

松風
落雲
参議篁
松風乃
そらに
八十
嵐
うけて
こぎぬく
人ふね
あまの釣舟

蝉丸
関屋
絵合
これやこの
ゆくも
かへるも
別れては
知るも
しらぬも
あふさかの
関

五葉
初音
陽成院
筑波根の
みなの
より
川
乙女の
そぐしてのよりく
閉と成ぬふ

乙女
天津風
雲のかよひ
吹
とぢよ
乙女の
そぐしてめむ

光春天皇
君ぐ〜光
春の野を
出て
若菜
摘む
振袖
雪を
降て

河原左大臣
みちのくの
忍ぶ
摺
乱れ
ゆへ
みだれ
そめ
ほころびぬ

中納言行平
立わかれ
いなばの
山の
峰に
おふる
松としきけば
今かへりこん

蒙古
神代
もきかず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは
在原業平朝臣

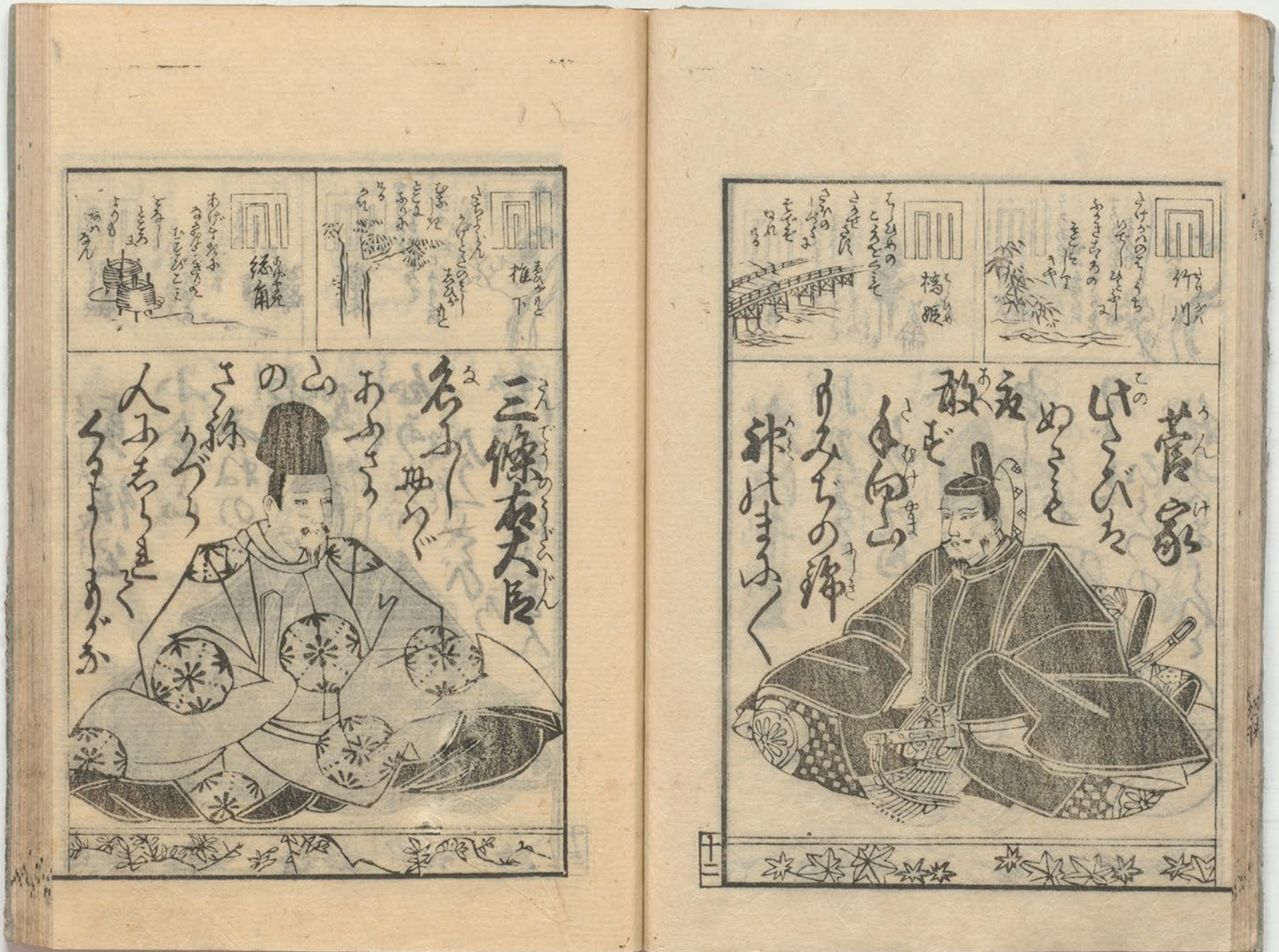
養菜上
養菜下
伊勢
難波ぐさ
みぐさ
芦の
ふしのま
あしぐ
この世
色して
よどや

梅が枝
養菜美
藤原敏行朝臣
住の江
さしも
よる波
さへや
夢路のよひぢ
人目よくらん

元良親王
俺ぬきで
今さら
恋のなかなる
身を焦がし
てもかなしかふ
十

旬宮
紅梅
大江千里
月見まく
あらたまの
こそ
おしえ
ゆくえ
ひとつの
秋のあはれ

文屋康秀
吹からに
あきの
草木の
しをるれば
むべ山風を
あらしといふらん
十二


竹川
橋姫
菅家
椎下
紙角
三條右大臣

東西
浮永
中納言義孝卿
見うしろ
わすれて
流るる
泉川
いでもこそ
恋しうそう

早蕨
宿木
貞信公
小倉山
みねの
紅葉
心あらば
今一度の
行幸まつ
十三

槽輪
源家千枚長
しらとは
をぞ
さび
しさ
ゆきうる
人めも
くさも
かまこめくゆりへで

名河門行姫
ゆき
ぐや
なんん
うり
れの
沖田ぐんをる
白菓れ枚

壬生忠岑
有明の
つれなく
みえし
別れより
暁ばかり
うきものは
なし
十五
坂上是則
あさぼらけ
有明の
月と
見るまで
吉野の
さとに
ふれる
白雪

春道列樹
山がつの
風の
うまるる
おぐらの
峯も
あらし
ぬ
三十六歌仙
紀友則
久かたの
ひかり
のどけ
き
春の日
おぐらの
山の
もみぢ

左 柿本人麿
右 紀貫之
蘆原奥風
絵とうを
知る人
せん
高
砂の
松もひさしく
友とうぶくに
紀貫之
人そのさ
ほもち
ろを
古今
集ひしの
名に匂ひる

文屋朝康
白露を
うぢの
吹
秋の野を
ぬきちらすなる
玉ぞ散ける

清原深養父
夏の夜を
まだ
宵
ながら
明ぬると
雲のいづこに
月やどるらん

右近
人の氣乃
十九

右中納言敦忠
右兼家卿
右中納言敦忠
右兼家卿
壬生忠見
人もまぢかこそ
人もまぢかこそ

右中納言敦忠
右中納言敦忠
平兼盛
人のふまく

中納言敦忠

清原元輔

左源宗平朝臣
みどりもそるくれゐの
いろ内さうくわ
右源信綱朝臣
あをよぎ
つきと
謙德公
いのちをも
人を
惜
いとづらよ
家ぬ色よりか

左義孝敦忠朝臣
秋くれば
月のかつら
右源重之
中納言朝忠
あの事の
絶てし
なくは
人を
身をも
惜
三十二

左 義系奥尼
左 義系元輔
恵慶法師
八重葎
やどの
淋しさ
人こそ
見えね
秋きぬるかな

左 義系清正
右 源順
曽祢好忠
由良の
戸と
人
梶をたえ
行くへも知らぬ
恋のみちかな

右坂上是則
右菅原道真
右藤原仲文
源重之

孫氏義春
君がため
命
なげくも
なりひさご
二十五

孫氏実方朝臣
かくばかり
えやはいぶ
きのさ
ひとりぬる
ものをおもふを

女中風俗の事

そもそも女中の風俗は
ふうぞくのくるしさ
とりどりなるうるまひ
うさまざまにへつらう
むかしのうらばをぢ
きくこんそやうこん
おんぢやうみてを見
のこころもひろびん
せぢうこん線を仕
くむぞーしゆるさに
とりつぐたを中ある
ゆるしまを見そうる
ひるもちにあるべん
きこんうつひとくん
あつくまりりぢ

昭ぬまこばそもる
まのこい
知りる
ぐう
なを
うーめーさ
あさぢう
けうれ
義永三信教信

あつくあーく世のこと
つぎにもよりを移り中
ちうつひく行いをる
しこ筆はむもこひく
さるぐあり後のなり
どまろく みるうぢ上
小後はあうむうりの
ぢんおを後るる女は
ひよ白むくさうろ
みりうぐはは白うーぐの
ちろきいをろ上る
まてたりかをその仕
きこををぐひろくい
ぢるりうろーしいそて
白をのうりは白月移る
衣ぐはいかて後どる

紫さを
ひとうぬる
よの間
いうみ
まは
久
しき
あとうは
しき
右大将三信母

儀同三司母
高まつの
奴未
まで
雑
きれば
ろを
沼の
命
大納言公任
滝の
絶て
久
しく
聞
なほ
名こそ
流て
なほ

和泉式部
あらざらむ
この世のほかの
思ひ出に
今一たびの
あふこともがな

紫式部
めぐりあひて
みしやそれとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の月かな

大貳三位
有るか
なの笹
風吹
いくそよ
人を
こ
ま
ゆ
い
ま
ま

赤染衛門
やすらは
で
ねるまし
かは
ちよ
ふく
こ
の
月を
ま
ち
る

中武弘門作
大江山
いく野の
みち
をゝれば
まゞこもも
見ぬも
天の橋立

進物積船の図
いなのゝ
ゝれ
都の
八重
桜
ゝふれる
白ひ
ぬるうれ
伊勢大神

清水綱言
葵をこめて
名の
そ
そ
ふ
ゆ
ゆ
ゆ

相模
あさぼらけ
ありあけの
月かと
見るまで
吉野の
里に
降しる
雪
白川
院
のべのみや
ゆきもまだ
きえぬ
春
なれば
いとど
しの
ぶの
乱れ
ての
ものを
思ふ
われか
な

ちりめん。ちりめんの
くくりのもの
ひととかみ
みそ色と
あり月そ
ぬもふ袋
がんのくちくいたまり
まべらり
小袖はく裏。裏ぞくよ
ゆそでにはむ
みハりあを
よくは三ツ
あれてつむ
べーそりを
うりくく出
袖とおりてづん
周防国伯
美女の
夏ぐらい
する
袋
うひなく
くくん
名ゝそ
ゆゝえん

啓蟄。がんもそ
みなふる
みそも袋
がんの時ハ
一ツの袋と
たべ一ツろ
うらくさ
むくのおりがん
ひめむふゆうもし
たのけもたのくの
おりがんかりそはむ
袋云の奥。袋の時
のくるのくは
ちと袋くと
今てはは袋
ゆうへのちへ
ねとつむ
お大僧正行基
法とめふ義と
ゆへ
山
猟
ふゆ
ゆ
知ゝへ

三條流
ぬかもあらで
浮世り
なぐくばあ
ぶしうなぐさ
夜まれ月うる
海奥
紙因法師
嵐ふく
三宝の
山の
石
梁
ぞハ
竜田の川め
みくさ茶うり

女茶湯指南

そもそも茶の湯は人倫の礼と聞くより女の茶の湯は若さを比べ〜

[illegible]

祇子内親王
家紀伊
書よめ
たりの
あぐ
うきしや
そで
雪も

前中納言匡房
高砂乃
尾上の
桜
咲
り
ぬ
山のうすき
きぬ

源俊頼朝臣

うかりける
人を初瀬
の山おろし
はげしかれと
祈らぬものを

藤原基俊

契りおきし
させもが
露を命に
懸けしかな

辛中南文
辛酉乃文
藤原の関白太政大臣
和田
左
漕出
久しきの
玉井水海ふ
紫徳流
瀬を渡る
岩に
滝川の
流れても
あらんとぞ
思ふ

歳をとらぬ
まくらは長き
さびられぬも
易く思しれ
らんとてくれさ
やうとて藁束
ゆへ枕くし陶
り紙先は花の
一名年嫁の抜
やくらく彼

源兼昌

淡路守

うたふ
の
なく
こゑ
我袖ぬらぬ
まくまの笑ひ

まてよ仇見ん
鉢ひらめくせん
打そるなるく
ゆるく猫
の
ふしとや
鈴しらく
めくく
初雪月二首
月花事
こやくくと侍

左京太夫顕輔

秋風に
たなび
く雲
の
絶まより
もれ出る月
の
影のさやけさ

待賢門院堀川

後徳大寺大臣

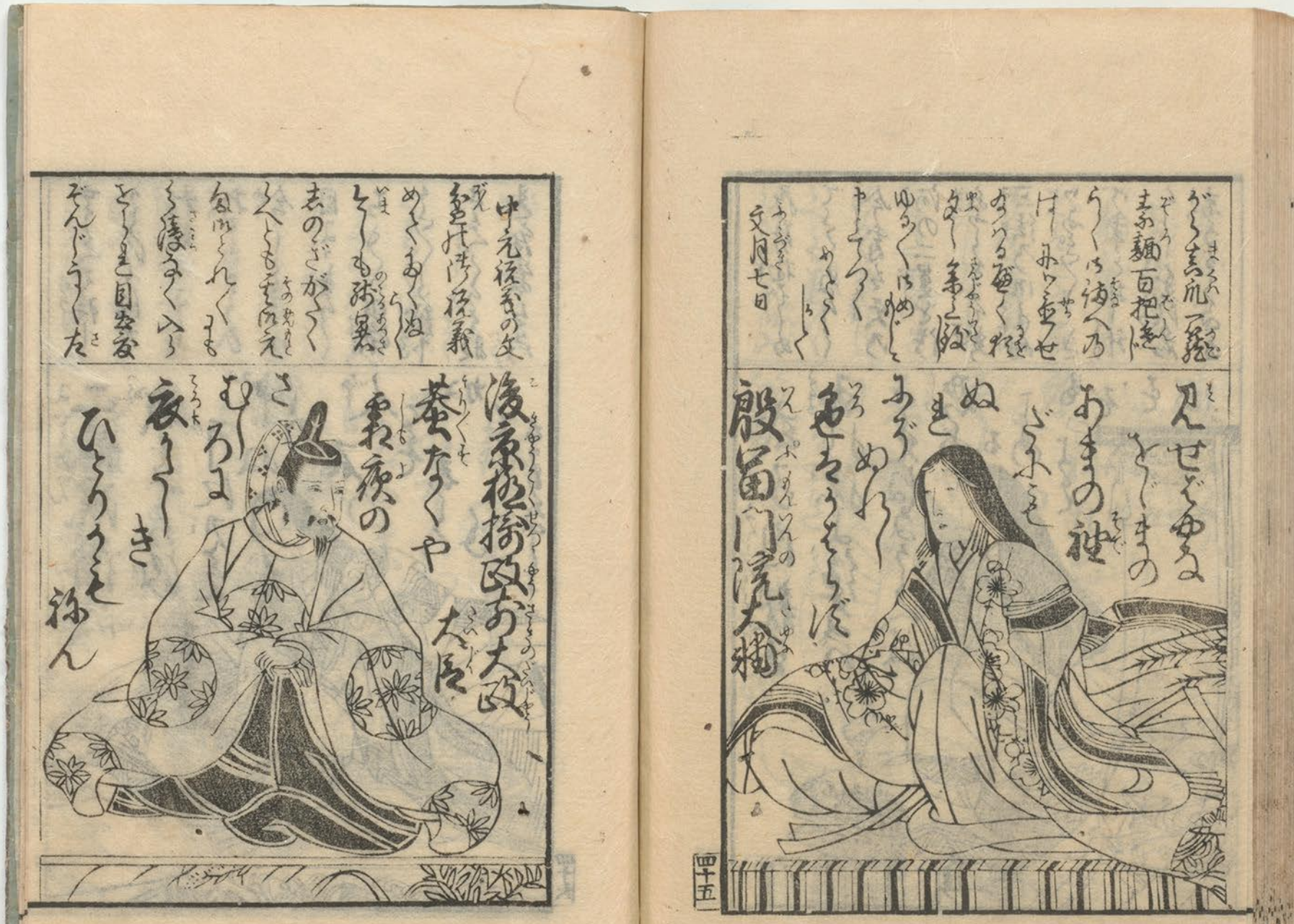
道因法師
なげけとて
月やは物を
思はぬ
かこちがほ
なる我涙
かな
正月
二月義旬の文
梅の花
ゆくへたえぬ
春の夜の
闇はあやなし
梅の花
色こそ見えね
香やは
隠る
世の中
よ
みちて
そ
なりける
ありあけ入
山の
端
ようこそ
春ぞ
たなびく

菊原法師
なるほどへい
まさば
ばや
のぞきん
うしと
今い哀しさ
十二
俊恵法師
歌もよろし
おもしろ
ばい
ゆうで
梅やの
ひまさへ
はまるうるわ

西行法師
歌あまたく
月やはな
初代
おもふ
かくちぐわ
なるか
我ものごとか

寂蓮法師
むらさめの
露も
まだ
ひぬ
槙の
霧こそたつ
あきの夕ぐれ

雅波江の
おれうの
孫の一葉
四十四


殷富門院大輔
文月七日
中元祝儀の文
後京極摂政太政大臣
藤原良経

二條流儀波
鎌倉右大臣
七月
九月

参議雅経
みちのく
山のあさ
風
小
夜
更く
たゝ
衣うつ
さむく
なる
四十七

入道太政大臣
むさぼる
嵐の
庭の
雪
四十八

四三位家隆
風そよぐ
なゝの
小川の
夕くれは
四姫ぞ夏の
もるしなるる

流石身の潔
人もゆ
恨めし
あぢ
さを
なく
世とゆ
儀
あらふ身を

著述　橘南谿翁
校正　男　茗谿
畫工　一柳嘉言
筆工　山田野亭

文政十二年己丑正月發兌

京都烏丸魚棚下ル　菊屋源兵衛
同　寺町御池通下ル　三木太郎右衛門
大阪御堂筋瓦町　小刀屋六兵衛
同　心齋橋通博勞町　河内屋長兵衛
同　心齋橋通久太良町　河内屋平七

林

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001630829

著述　橘南谿翁
校正　男　芳谿
畫工　一柳嘉言
筆工　山田野亭

文政十二年己丑正月發兌

書林
京都烏丸魚棚下ル　菊屋源兵衛
同　寺町御池通下ル　三木太郎右衛門
大阪御堂筋元町　小刀屋六兵衛
同　心齋橋通博勞町　河内屋長兵衛
同　心齋橋通久太郎町　河内屋平七